

# 近代短歌

～与謝野晶子を  
中心として～



昨年、与謝野晶子没後60年を記念して、関西学院大学図書館が所蔵する特別文庫「丹羽記念文庫」を中心とした第11回大学図書館特別展示・学術資料講演会「晶子と安喜子～与謝野晶子と同時代の歌人たち～」を開催した。この開催の契機となったのが新たに発見された「丹羽安喜子宛与謝野晶子書簡」の購入であった。丹羽安喜子は、1919年以来、晶子の愛弟子で、近代短歌の東京新詩社の社友であり、自ら「芦屋短歌会」を主宰すると同時に、明治・大正・昭和初期に出版された近代短歌集のほとんどを初版の形で蒐集した。その中でも晶子の短歌集の初版を多く含むコレクションはとりわけ貴重なものである。このコレクションは安喜子の夫で関西学院の財務部長・理事を務め、自らも歌人であった丹羽俊彦から関西学院に寄贈された。

この丹羽夫妻の文芸活動は、「郷土文学」とは異なる河内厚郎の提唱する「市民文学の系譜」に連なるものであり、「阪神間学」の視点の一つである神戸モダニズムの一環を担うものである。関西学院はこの神戸モダニズムの形成に貢献した多くの詩人・画家を輩出した。詩人では佐藤清、竹友藻風、竹中郁、坂本遼らであり、画家では野口弥太郎、神原浩、吉原治良、北村今三らである。

今回、この「丹羽記念文庫」所蔵のものを中心に展示するとともに、新たに昨年の特別展示を機会に神戸女子大学名誉教授で神戸の生田神社宮司である加藤隆久氏から寄贈された新資料を展示する。現在、関西学院大学では入江春行元大谷女子大学教授らの協力を得ながら、その翻刻・研究に取り組んでいるものである。この成果の公刊は、おそらく安喜子研究だけでなく晶子研究の進展に貢献するものと信じてやまない。

(井上琢智)

## 与謝野晶子 (よさのあきこ)

1878（明治11）年12月7日堺市に生まれる。

父鳳宗七、母つねの三女。本名志よう。

堺女学校補習科を卒業後、家業を手伝うかたわら、独学で古典の勉強をする。20歳頃から作歌を志し、1900（明治33）年『明星』2号から発表をした。与謝野鉄幹に出会った翌年に上京し、前妻と別れた鉄幹と結婚した。同年、『みだれ髪』を出版。初めての女流による画期的な新派歌集で、その鮮烈な自我の昂揚と多彩な美の乱舞は、大反響を呼び、晶子は一躍スターの座に上る。また、1904（明治37）年9月に発表した社会性を持つ長詩「君死にたまふこと勿れ」は、この時代に珍しい大胆な発言で多くの論争を呼び起こした。

『明星』廃刊後、創作不振に悩む鉄幹の渡欧に自らも跡を追い外遊し、西欧女性の実態を見た。帰国後、婦人、教育問題などを中心に活発な評論活動を展開する。

1921（大正10）年、文化学院を創立し、芸術自由教育、女子教育の実践にもたずさわる。1940（昭和15）年5月、脳溢血で倒れ静養に努めるが、1942（昭和17）年1月病状悪化し、狭心症を併発。尿毒症を起こし、同年5月29日に死去。多磨墓地の鉄幹のかたわらに葬られる。享年65歳。

芦屋の丹羽邸にて  
左：丹羽安喜子  
右：与謝野晶子



1

2

3

4

1  
みだれ髪  
第3版  
与謝野晶子著  
杉本書店・金尾文淵堂  
1904（明治37）年

2  
小扇  
与謝野晶子著  
金尾文淵堂  
1904（明治37）年

3  
毒草  
与謝野鉄幹・与謝野晶子合著  
本郷書院  
1904（明治37）年

4  
恋衣  
山川登美子・増田雅子・与謝野晶子著  
本郷書院  
1905（明治38）年

### 『みだれ髪』第3版

初版は1901（明治34）年8月。晶子の処女歌集で、短歌が、まだ「和歌」とか「敷島の道」などによばれて、花鳥諷詠をこととするものという観念が色濃く残っていた明治の半ば、大阪は堺出身の無名の少女、鳳晶子が世に問うて、一世を驚倒させた歌集である。なぜならそれは、恋愛の自由を謳歌し、肉体の美を讃える歌で埋めつくされていたからである。この歌集の初版本はまだ旧姓で出しているが、第3版からは「与謝野晶子」となっている。表紙はデザインの面からも旧来の殻を破る大胆なものであった。装幀・挿絵（七葉）藤島武二。挿絵は「恋愛」「現代の小説」「白百合」「春」「夏」「秋」「冬」の七葉である。

### 『小扇』

晶子の第2歌集。第3版以降の『みだれ髪』を除けば、晶子が結婚後初めて世に問うた歌集である。巻末に上田敏と山田禎一郎の『みだれ髪』評が載っているが、違う歌集の評が併載されているのは珍しい。上田敏は『明星』の有力同人であった。歌風には『みだれ髪』の余韻なおさめやらぬものが感じられる。装幀・挿画（四葉）藤島武二。

### 『毒草』

はじめて鉄幹と合著で出した集である。その意味では二人の恋の所産とも言えよう。内容は、短歌の他、随筆、長詩が数多く収められ、俳句もあるというユニークなもので、形が正方形というのも変っている。巻頭に「つつしみて、このひと巻を、師落合直文先生の在天の御霊に捧げまつる」という献辞がある。落合直文は、苦学力行の鉄幹の才能を愛惜し、なにかと引立ててくれた人である。鉄幹の部に「旅順封鎖隊」「嗚呼広瀬中佐」等の唱歌があるのは、時代を感じさせる。装幀・挿画（四葉）藤島武二。

### 『恋衣』

晶子と共に『明星』の三才媛と称揚された山川登美子・増田雅子との合同詩歌集である。そういう意味では「星董派」と言われた明星派の代表的なアンソロジーとも言えよう。登美子・雅子はそれぞれ結婚したが、登美子は若くして未亡人となり、薄幸の人生を終え、雅子は慶應義塾大学教授茅野蕭々夫人として恵まれた人生を過ごし、夫の死後数日にして世を去った。この集は、晶子の永遠の絶唱「君死にたまふことなかれ」が収められていることによっても知られる。短歌の方は一段と洗練の度が加えられている。装幀・挿絵（七葉）中沢弘光。



5

6

7

8

5  
舞姫  
与謝野晶子著  
如山堂書店  
1906（明治39）年

6  
夢之華  
与謝野晶子著  
金尾文淵堂  
1906（明治39）年

7  
常夏  
与謝野晶子著  
大倉書店  
1908（明治41）年

8  
佐保姫  
与謝野晶子著  
日吉丸書房  
1909（明治42）年

## 『舞姫』

『小扇』以来2年ぶりの、そして結婚後二つめの彼女だけの、短歌だけの集である。この集には題名にふさわしく、中沢弘光描く「京の清水」が口絵として挿入され、王朝趣味、京の風物、寺院などを詠んだものが多い。「与謝野氏著作書目」あり。装幀・挿画中沢弘光。

## 『夢之華』

巻頭に「浪華なる小林政治の君に捧ぐ」とある。小林政治は、晶子の堺以来の歌友であり、鉄幹・晶子の文学活動に対して援助を惜しまなかったといわれる。彼の娘の一人が、晶子の長男、光の妻である。短歌307首から成る集で、中沢弘光の挿画四葉が入っている。激情の二十代の終りにあたっての感慨を詠んだと思われる歌が多く、そういう意味で『みだれ髪』と対比させて読むと興味は尽きない。「与謝野氏著作書目」あり。装幀杉浦朝武。

## 『常夏』

晶子の三十代（数え年）の出発を飾る歌集であると同時に『明星』時代の最後の歌集でもある。文壇はまさに自然主義の全盛時代になろうというのに、いつまでも空想的浪漫主義にしがみついている『明星』は多くの読者を失い、日露戦争後のきびしい世情の中にあって財政的にも行詰り、晶子の著書によってその穴うめをしなければなくなる。彼女が矢継ぎ早に著書を出したのにはそういう理由も考えられる。この集にも王朝趣味の色濃く感じられるものが多い。「馬場孤蝶の君に捧ぐ」という小献詞がついている。装幀中沢弘光。挿画（二葉）岡田三郎助・中沢弘光。著者肖像（一葉）。

## 『佐保姫』

時代を洞察するに敏な北原白秋・吉井勇・木下空太郎等、末期の『明星』を支えて来た有力同人の連袂脱退が直接のきっかけとなって『明星』が第百号を以て廃刊したあと最初の歌集である。巻頭に「故山川登美子の君に捧げまつ」と献辞がある。時にライバルであり、時に親友であった登美子の死に際し、自らは三十代の半ばへ

と歩を進める晶子に、作歌上の一つの転機が訪れたかのように、この集には、ひたすら前を向いて歩いていた彼女がしきりに後をふりかえる、という趣の歌が少なくない。装幀和田英作。挿画和田英作・和田三造。

## 『花』

1910（明治43）年初版。『恋衣』以来、6年ぶり、三つめの合著歌集で、相手は江南文三である。文三の「ことわりがき」に「此書は著者の実見したことのある草木の中から、屢く書物などに出るやつを百ばかり選んで、その草木に関する洒麗、神話、悪口、伝説、その草木に関する俚諺、故事、熟語をかき集めたもの」とあるように、文字通り「花」に関する歌文集で、晶子の部には短歌50首が収められている。但し、ほとんど他集から採ったものである。装幀・挿画岡野栄・伊上凡骨。

## 『春泥集』

初版は1911（明治44）年1月。三十代の半ばを迎えて円熟の域を歩む晶子について、上田敏は、この歌集のために書いた長文の序の中で「日本歌壇に於ける与謝野夫人は、古の紫式部、清少納言、赤染衛門はものかは、新古今集中の女詩人、かの俊成が女に比して優るとも劣る事が無い」と絶賛している。その一方、『明星』廃刊以来、失意の日々を鉄幹は送り、生活の重荷は一段と晶子の双肩にかかって来るが、そういう夫について詠んだものがこの集に目立つ。装幀藤島武二。挿画（一葉）中沢弘光。

## 『青海波』

明治の最後の歌集である。八面六臂の活動を続ける彼女にとって、多くの子女の養育はかなり重い負担であったとも思われるが、その間にあってもある時は平凡な一人の母であった。この集には、自らの中年を思う一方、子どもの成長をうたった作品が多く見られる。この集を作り終えた彼女は、文学上の転機を求めて欧州旅行へと出かけた鉄幹のあとを追って彼女自身も長い旅の途に上る。

- 9  
花  
再版  
江南文三・与謝野晶子合著  
誠文館出版部  
1910（明治43）年
- 10  
春泥集  
第7版  
与謝野晶子著  
金尾文淵堂  
1913（大正2）年
- 11  
青海波  
与謝野晶子著  
有朋館  
1912（明治45）年



- 12  
*Onde del mare azzurro (SEI-GAI-HA)*  
与謝野晶子著  
Sakura  
1920（大正9）年
- 13  
夏より秋へ  
与謝野晶子著  
金尾文淵堂  
1914（大正3）年
- 14  
さくら草  
与謝野晶子著  
東雲堂書店  
1915（大正4）年

15  
朱葉集  
与謝野晶子著  
金尾文淵堂  
1916（大正5）年

16  
舞ごろも  
与謝野晶子著  
天弦堂書房  
1916（大正5）年

17  
明星抄上・下  
与謝野晶子著  
金尾文淵堂  
〔1918（大正7）年〕



18  
火の鳥  
再版  
与謝野晶子著  
金尾文淵堂  
1922（大正11）年

19  
太陽と薔薇  
与謝野晶子著  
アルス  
1921（大正10）年

20  
草の夢  
与謝野晶子著  
日本評論社出版部  
1922（大正11）年

### “Onde del mare azzurro (SEI-GAI-HA)”

『青海波』を下位春吉とElpidio Jencoがイタリア語に訳したもの。一首毎にそれぞれ訳者が題をつけている。カットなども日本風俗を絵にしたものが載せられている。出版社のちらしが挿入されている。

### 『夏より秋へ』

晶子の外遊中に日本の元号は大正となっていた。従って、この集は、外遊後の第1作であり、大正期の第1作である。また、『恋衣』以来9年ぶりの詩歌集である。著者自身が描いた「フォンテンプロウの白樺」「モンサウ公園」の二つの絵が挿入されているのが目をひく。石川啄木を悼んだ歌がある。啄木は晶子に可愛がられ、啄木の方も姉のように慕い、『明星』の末期に北原白秋等から脱退を勧められたが応ぜず、再建に努力し、後継誌『スバル』の編集にあたった。この集は『みだれ髪』以来12年ぶり、2回目のひらがな混りの題名である。装幀・挿画藤島武二。付録として与謝野晶子習作画2枚がある。

### 『さくら草』

『夏より秋へ』に続いての詩歌集である。後に標題が『桜草』と改められた。晶子も三十代が終ろうとする哀感をにじませている。装幀・挿画有島生馬。歌数421首。213頁以降は詩。

### 『朱葉集』

この集の巻末に「与謝野宅短歌会規定」というのがあって「批評及び加筆は与謝野晶子自ら当ります」とある。鉄幹の存在は、晶子の思惑の如何にかかわらず、客観的には過去の人となっているようである。装幀・挿画（一葉）中沢弘光。

### 『舞ごろも』

『さくら草』に続いての詩歌集である。巻頭に自序あり。初めの88頁に短歌172首。そのあとに詩篇若干も収められている。装幀橋口五葉。

### 『明星抄』

上・下本 和綴じ 帙入り。装幀平福百穂。自作百首の木版刷り。

### 『火の鳥』

初版は1919（大正8）年8月。2年ぶりの歌集である。巻頭に「河崎夏子の君に捧ぐ」という献辞と、鉄幹の「火の鳥に就て」という文がある。名前にふさわしい派手な装幀である。フランス生活の回想の歌が多い。装幀・挿絵（三葉）中沢弘光。

### 『太陽と薔薇』

巻頭「巴里にある平野万里氏に捧ぐ」という献辞と自序七頁がある。万里は『明星』以来の歌友である。装幀山本鼎。挿画（一葉）晶子。

### 『草の夢』

四十代の半ばを歩む晶子のこの歌集には叙景の歌が多い。「森林太郎先生に捧ぐ」と献辞がある。森林太郎（鷗外）は「晶子源氏」を校閲するなど、晶子にとっては恩人といっても差し支えない。装幀廣川松五郎。彫刻伊上凡骨。

### 『流星の道』

この頃の彼女が、歌壇の大勢の外にいるという意識を強く持っていたことは、自序によっても知られる。この前後、関東大震災と大病という二つの厄災が彼女にあった。短歌598首の他、感想「詩歌の本質」、「自分の歌について」あり。装幀図案中川紀元。木版彫刻伊上凡骨。

### 『瑠璃光』

大正時代最後の作で、『舞ごろも』以来9年ぶりの詩歌集である。歌数529首。「木下空太郎様に捧ぐ」という献辞がある。巻頭「鏡中小景」10章（序にかえて）がある。装幀図案山本鼎。

21  
流星の道  
与謝野晶子著  
新潮社  
1924（大正13）年

22  
瑠璃光  
与謝野晶子著  
アルス  
1925（大正14）年

23  
心の遠景  
与謝野晶子著  
日本評論社  
1928（昭和3）年



24  
霧島の歌  
与謝野寛・与謝野晶子共著  
改造社  
1929（昭和4）年

25  
白櫻集  
与謝野晶子著  
改造社  
1942（昭和17）年

26  
落花抄  
再版  
与謝野晶子著  
櫻井書店  
1943（昭和18）年

### 『心の遠景』

昭和時代に入って最初の歌集である。情熱の歌人と言われた晶子もいつしか五十の坂を越えた。2年半ぶりの歌集であるだけに、歌数が1,494首と、今までで最も多く収められている。装幀木下空太郎。彫刻伊上凡骨。有島生馬への献辞あり。

### 『霧島の歌』

『毒草』以来実に25年ぶりに夫と共著で出した歌文集で、題名の通り霧島に遊んだ折りの歌や文を集めたものである。多数の写真が挿入されているのは、それまでの歌集になかったことである。

### 『白櫻集』

晶子の死後百日祭をめぐりとして平野万里等が編集したが、まだ歌集に載せられていない約五千首の中から2,423首を選んだものである。「白櫻」というのは晶子の院号である。序高村光太郎・有島生馬。跋平野万里。

### 『落花抄』

初版は1942（昭和17）年11月。感想・短歌。巻末に与謝野晶子年譜がある。病床の晶子のスケッチあり。装幀津田青楓。

（『みだれ髪』第3版～『落花抄』入江春行）



27  
みだれ髪 初版  
鳳晶子著  
東京新詩社・伊藤文友館  
1901（明治34）年

### 『みだれ髪』初版

『みだれ髪』は、1901（明治34）年8月、東京新詩社・伊藤文友館から発行された、晶子の第一歌集である。著者名は鳳晶子（奥付では昌子と誤植）。装幀は洋画家藤島武二によるもので、巻頭に「表紙画みだれ髪の輪郭は恋愛の矢のハートを射たるにて矢の根より吹き出でたる花は詩を意味せるなり」という武二の言が記されている。晶子は、一年

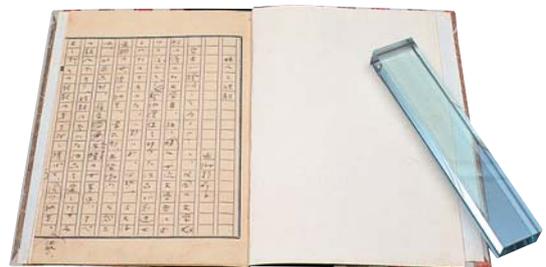
あまりの『明星』での活躍をこの歌集にまとめ、若々しい情熱や感情をストレートに、また絢爛に歌い上げ、ロマンチズムの新しい旗手として注目を浴びた。第3版が、1904（明治37）年9月に、大阪の杉本書店・金尾文淵堂から発行されているが、この版において改訂が施され、「訂正改版」として発行された。著者名も与謝野晶子に変わっている。本館の丹羽記念文庫には、初版・第3版・第4版（1906年10月）の三種類が所蔵されている。（清水康次）

### 『原稿 婦人と短歌』

【概要】400字詰原稿用紙2枚

草稿「婦人と短歌」は、『女子文壇』などの投書雑誌に書かれた初心者向けの文章の一部であろうか。あるいは、講演の要旨であろうか。古典文学の例を引きながら、「我国の女子の素質が文学的であり、殊に端的に感情を表現する短歌に適してゐる」とし、現代の女性にも「発奮」を望んでいる。また、「私は此のお話の中で、私が歌を作つてゐる体験について申述べようと思う」と記されている。ただし、筆跡は与謝野寛の代筆と思われる。寛の代筆した晶子の草稿は他にも存在しており、二人の協力関係を示しているといえる。

掲載誌や執筆時期は未詳である。内容的には、寛の「和歌は婦人に適す」（1909年4月）と同趣旨であり、晶子の「女子と詩歌」（1920年2月）・「女子と文学」（1929年10月）などとも重なるものである。なお、作歌について述べた晶子の著作には、『歌の作りやう』（1915年12月）・『晶子歌話』（1919年10月）などがある。（清水康次）



28  
原稿 婦人と短歌  
与謝野晶子著（筆跡は与謝野寛代筆と思われる）

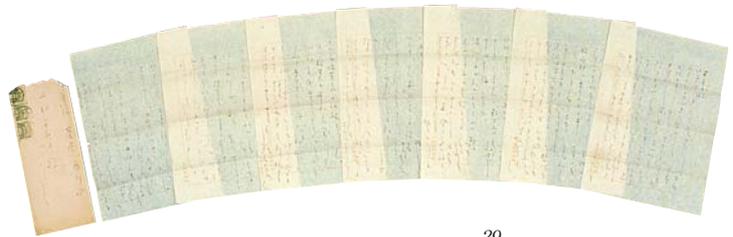
## 「丹羽安喜子宛与謝野晶子書簡」

1934（昭和9）年1月17日付

（東京都杉並区荻窪の与謝野晶子から芦屋の  
丹羽安喜子に送られたもの）

【概要】 便箋7枚

【翻刻】

29  
丹羽安喜子宛与謝野晶子書簡  
1934（昭和9）年1月17日付

安喜子様

御無沙汰をいたし居り候ひしうちに生死のさかひにまで迷ひ歩みしこと、今はお話になりてしまひしことながら、今年のははれに候かな。去年か一昨年の、あなた様にもはやよろしと手紙かき候てその夕にまたわろくなり候ひしことをおもひ、迷信にてはなけれど、さることのなきがよろしとおもひ、いかにお案じなされてなど御志を存じ候 心よりおもひやりながらえふでをとらず候ひき。

箱根ならば塔の沢あたりの唯の湯の却って心臓の療法としても十分くらゐの入浴がよろしとされ居り候よしにて、子供も臨床科に変わり候て日あさく、その、ちいろいろ本をよみてまゐり、今は私もたゞ生きる力もえてこしやうに候。黒磯は山の下四里にてそこより医師をむかへ候こと大変なれば、初めは願ひしてありしがのちには東京の光をよぶかたよしとて子をよび候て、共にかへりしに候。

帰りし夜も心配に候ひき。夜の一時ごろにまた近江先生に来てもらひなどいたし候。風邪などはどこへか飛んでしまひこしつになる印もつに候が、殺生石の気に逃げざりしならばなど悔い居り候。満洲の子が私の立ちし日の夜につきしに候が、その子が電報にてもうちてくれしならば私はらくゆになりしものをなど申候。それ以来、全く気の弱くなり候て、その子十四日に立ちて帰り候ひしに

今夜あたり奉天へつき候べし、帰りて直ちに母の死をきくなどとはよくあることなりなどと昨夜はそれにてまた神経がたかぶり眠りぐるしく候ひき。まだ来週までは学校へはまゐるまじく候。それはこの上もなくさびしく候。知人の多く死なれ候とも私をいかにいのらせ候ことに候。

歌かひの旅をわろくいふ人あり候ことさることもとよりあり候べし。何か悪しく候べき。書きでつくるより却てらくならるべく候

去年千石原にてこゝちわろくなりしも今にしておもひ候へば、私などの心臓の弱き

ものには硫黄泉が強敵なりしに候。河つの殺生石のある山に候へばいっさんひそその他おそろしき気の立ち候ことそれをおもはざりし無智を恥しく存じ候。しかも俄なる雪ふり出でて低気圧とも申すべき、その月の十日気流の中にて私の脈すくなく消えてやうやくによろしく、たゞおもへば当然とや申すことに

来月あたり主人山口県へ一寸まゐるべく、(外のことにてまゐるなれど)井上様その旅行の帰路のことなど御けいくわくをして見んなど申され候ことは年の終りの話にて候ひしが、私はせめて蘆屋までゆきて待ちてゐらるゝほどにからだがなってくれば宜しけれど、少し無理にて候。子の光が三月には旅行をしてもよろしなど申し候。

昨夜からは雪にて庭は艶なるおもむきを見せ候。紅梅が三分ぐらゐ咲き居り候。風さむく候。あなた様もおからだおいとひなさるべく候。お電話のせつ石井さんにも宜しく御つたへ下されたく候。くらまにて二十日すぎには石井丹羽二氏と会食が出来んかとあり候ひしがいかかや。御主人様にもよろしく御つたへ下されたく候。あなたの正月の御労をなぐさめ候

十七日

晶子  
草々にかきたるに候

(入江春行)

## 丹羽安喜子 (にわあきこ)

1892（明治25）年3月に三重県津市に生まれる。  
1905（明治38）年に東京府立第三高等女学校を卒業。  
1909（明治42）年に丹羽俊彦と結婚。  
1919（大正8）年5月に与謝野鉄幹、晶子に師事し、東京新社の社友となる。  
1936（昭和11）年3月に第一歌集『蘆屋より』を出版する。翌年に関西の友人たちと紫絃社を興し、1940（昭和15）年に芦屋短歌会を興した。  
1944（昭和19）年2月に第二歌集『低唱』を出版する。  
1960（昭和35）年8月に死去。（『丹羽記念文庫目録』より）



30.31  
明星 創刊号・第二号  
東京新詩社  
1900(明治33)年

### 『明星』1900(明治33)年—1908(明治41)年(通巻百号)

1900(明治33)年4月から1908(明治41)年の11月まで通巻百号からなるもので、与謝野鉄幹が始めた「東京新詩社」の機関雑誌である。創刊号から第五号までは新聞型のものであったが、第六号からは大版の雑誌型で、一時『白百合』の名で発行されたこともある。鉄幹はあさ香社に参加し、1894(明治27)年5月には「亡国の音」を書いて、当時一般に行われていた桂蘭派の女性的・伝統墨守的・技巧的な作風を厳しく批判攻撃し、和歌革新運動の最先端にたって活躍していたが、更に強く進めるため1899(明治32)年11月この「東京新詩社」を設立したのである。

『明星』の主幹は鉄幹であるが、その執筆者は鉄幹、晶子を中心に当時の主要な文芸人に及んでいる。晶子は第二号からの登場であるが、鉄幹に指導され、薄田泣菫・蒲原有明の影響を強く受けたと言われるが、やがて鉄幹と恋愛し、結婚する。その間の短歌が『明星』紙上で発表され、『みだれ髪』として刊行される。その「やは肌のあつき血汐にふれも見でさびしからずや道を説く君」「春みじかし何に不滅の生命ぞとちからある乳を手にしぐらせぬ」などの強烈な情熱・ローマン精神は鉄幹にも強い影響を逆に与え、以後の『明星』の基本的性格を形造っていったともいえる。その詩風は星菫調といわれ、唯美主義的で空想的、高踏的で、初期ローマン主義の『文学界』の内向的・精神的・中世的なものに対して、外向的・官能的・感覚的・王朝的な後期ローマン主義としての性格をもたしめるものとなっている。

(中島洋一)

### 『蘆屋より』出版記念会芳名録・添削歌稿

生田神社(神戸市中央区)宮司・加藤隆久氏(神戸女子大学名誉教授<日本史学>)から、夫・俊彦氏が法人の理事をしていたことなど、ゆかりの深い関西学院大学で保存されるのがもっとも適当であろうとして寄贈され

た丹羽安喜子に関する資料の主要な部分を占めるのは、与謝野晶子が朱を入れた安喜子の歌稿五百四十四枚である。

晶子が旅行などで揮毫した色紙短冊の類は今でも時折見つかるが、同一人物の短歌に対する添削がこのように大量に保存されているのは他に例がないと思われる。

この添削原稿から晶子に関して二つのことがわかる。

一つは丹羽安喜子に対する思い入れの深さである。

与謝野家の生活と名誉を一身にない、八面六臂の活動をしていた超多忙の晶子がすべての弟子の歌稿をこのように丁寧に添削していたとは思えないので、筋が良いと見た安喜子を明星派の関西方面の代表格として積極的に育成しようとしたのではないかと思われる。その期間は、第二次『明星』創刊の前年の1920(大正9)年から晶子が亡くなる二年前の1940(昭和15)年までという長さであるから、そのかかわりの深さがしのばれる。

二つ目は、添削を通じてわかる晶子の指導理念や作歌意識である。驚いたことに、単に字句や表現の仕方の修正にとどまらず「同じ着想をくり返し給ふことになり候ては、多作もよろしからず候、十首を一首にするだけのご選択が必要に候」「平凡なる着想を捨て去ることも一つの大切な心掛けに候」などと、必要に応じて適切な助言をも書き入れている。略字を安易に使うことをいましめたりもしている。

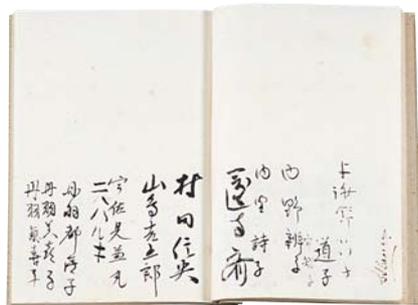
この添削歌稿は、加藤氏が十八年前に神戸のさる古書店で籐で編んだ文箱に入っているのを見つけて、一括購入されたのであるが、この箱には、安喜子の最初の歌集『蘆屋より』(1936<昭和11>年、益文堂刊、晶子が序文を書いている)の表紙の原画(石井柏亭画、三枚)や、その歌集の出版記念会の、百六十字詰原稿用紙百三十五枚(表紙とも)に及ぶ詳細な記録(若干誤記があるが)やその時の芳名録も入っていて、二人の「あき子」に関する伝記資料としても珍重されよう。

晶子と安喜子のかかわりについては、前頁に記載されている。(入江春行)

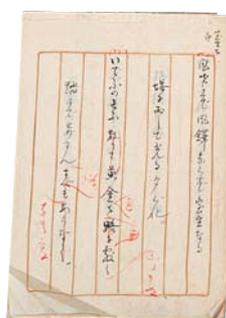
### 『蘆屋より』

歌集。丹羽安喜子著、与謝野晶子序、自跋。1936(昭和11)年4月、東京神田、益文堂より刊行。

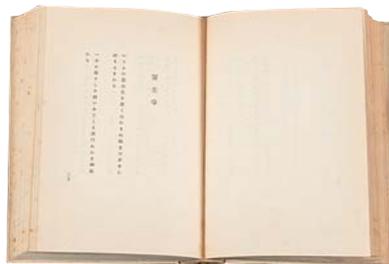
序文冒頭で晶子は安喜子に対し、「創作の名にふさわしい真実の歌を作った人として推薦する」と惜しみない評価を与えている。また、晶子は、この推薦の辞に続き、歌が新しい芸術品となる理想の作歌のあり方の定義を述べた後、安喜子の数ある歌(跋文によれば約三千首)から千百幾十首をかかるとして精選したという旨を書く。すなわち、与謝野晶子こそが、この書の選者であることを披露しているのである。序文は続き、このような二人の師弟関係を広く読者に知らしめるため、晶子と安喜子の邂逅、夫、与謝野鉄幹と丹羽俊彦も含めた「家



32



34



33

32  
『蘆屋より』  
出版記念会芳名録  
1936（昭和11）年

33  
蘆屋より  
丹羽安喜子著  
益文堂  
1936（昭和11）年

34  
添削歌稿  
丹羽安喜子著  
（添削は与謝野晶子）

族同様」のつきあいとなる経緯を、関西、芦屋文化圏とのつながりをも含めて語っている。序文は、夫人の人となり称揚したあと、最後に1934（昭和9）年の大水害の一ヶ月後に詠草が届けられ、鉄幹とともに驚いたことが付されている。

安喜子は、本書見開きに「与謝野寛先生の霊前に捧ぐ」と付したうえに、跋文で晶子、鉄幹への謝辞とともに、一周忌を迎える鉄幹への哀悼、文学へ誘ってくれた夫俊彦への感謝を書いている。

本書の出版記念会は、与謝野晶子と本書の表紙絵を描いた石井柏亭が列席し、1936（昭和11）年5月2日、大阪倶楽部で盛大に行われている。

今回展示した新出の書簡にある「石井さん」はこの「柏亭」と考えられよう。そうすると、上梓の2年以上前から本書の出版計画がなされていた可能性が出てくる。文面からうかがえる、晶子と安喜子の親密な師弟関係、芦屋への思い入れ、「ご主人様（俊彦氏）」という親族とのつきあい方は、本書の序、跋の内容と一致する。

本書の成立意義は、「晶子と安喜子」を固く結んでいる点である。新出書簡は、その点を裏付ける資料として興味深いといえる。

（森田雅也、内倉尚嗣、中村清治）

山の旅」の歌とは異なる。草稿というより、書家安喜子の手慰みと考えられる。

（森田雅也、内倉尚嗣、中村清治）

### 『低唱』

歌集。丹羽俊彦・安喜子著、丹羽俊彦前記、丹羽安喜子後記。1944（昭和19）年2月、京都愛宕郡鞍馬、紫絃社より刊行。紫絃社は晶子門新詩社社友。

俊彦三百首、安喜子五百首を入首。後記によれば、安喜子五百首は『蘆屋より』以降の作品から約半数を自選した。俊彦の緒言に初代丹羽宗兵衛没後三百三十三年のことや、この書を記録として子々孫々に伝えるということがあることから、私家版として企図されたといえる。それだけに安喜子の内的生活を知る上の貴重な資料であることは確かである。晶子への思いは、「師とともに」の35首に詠まれているが、見開きに付す「昭和8年夏著者邸に於ける与謝野両先生」の写真が、本書が与謝野晶子三回忌として、安喜子が晶子の霊前に捧げたものであることを示している。

（森田雅也、内倉尚嗣、中村清治）

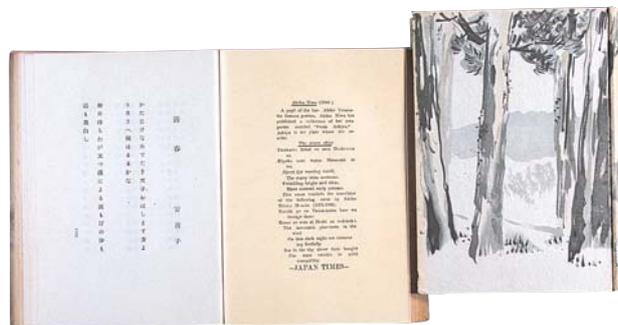


35  
石山のたび  
丹羽安喜子著  
1941（昭和16）年

### 『石山のたび』

料紙に安喜子自らの歌を自らちらし書きにし、それを自ら製本したものと推察できる。11首、12丁。1丁めに「昭和16年初夏吟行 安喜子」と墨書する。

歌は『低唱』所収「石山」19首中にすべて入首。同書所収俊彦歌「石



36  
低唱  
丹羽俊彦・丹羽安喜子著  
紫絃社  
1944（昭和19）年